

はしがき

辻山栄子

これが、卒業論集に寄せる教員生活最後の「はしがき」になった。教員生活 41 年の間に、世に送り出したゼミ生は 700 人を超えている。そのうち女子学生比率がどのくらいになるのか、正確なところは分からない。しかし、年々女子学生比率が増加してきたことだけは確かだ。50 年近く前に自分が早稲田大学商学部の学生だったころ、1 学年に 1500 人ほどいた学生の中で同期の女子学生は 16 人だったから、その比率は 1% ほどだった。それが今は 3 割に近付いている。女子学生の進路も、昔は外資系企業の秘書などが花形だったが、今では男子学生と肩を並べて公認会計士や上場企業の管理職を目指すことが当たり前の時代になった。時代の変化というべきか。実際、新聞紙上で女性活躍時代という見出しを目にしない日はない。女性にとって恵まれた時代になったというのが、世の常識になっている。

しかし本当にそうだろうか。身の回りの共働き世帯の実情は惨憺たるものだ。保育園の待機児童数は一向に減らない。首尾よく保育園に受け入れられたとしても、毎日夕方 6 時に迎えに行くためには職場を 5 時過ぎには出なければならない。お迎えをシッターさんに頼んで、帰宅時間を 8 時まで延ばしても、職場での居心地の悪さはあまり変わらない。おまけに乳幼児はしょっちゅう熱を出す。その都度、病児保育の手配をしたり、仕事を休んだり。働くママたちは本当に余裕がない。疲れ切っている。世の中で輝いてみえるキャリア女性のなかには、実は未婚だったり、結婚はしていても子供は持たなかったりしている人が案外多いのが実情だ。キャリアと家庭、どちらか二者択一を迫られるという女性の実情は、昔も今もあまり変わっていないのが現実なのである。男女平等だとか、ダイバーシティ（多様性の受容）だとか、言葉だけが独り歩きしている分だけ、かえってたちの悪い時代になっているような気もしてくる。

しかし、目を海外に転じてみると、全く異なる風景が見えてくる。欧州では、男女ともに定時退社して夕食は家族で食べるのが日常の風景である国が多い。一方で、中間管理職の女性比率が日本と比べて格段に高い東南アジアの国々では、家に住み込みのシッターさんがいることも珍しくない。きちんとした国の管理下で、所得格差のある国からシッターさんとしての出稼ぎを受け入れている。このやり方については賛否両論があろうが、少なくとも受け入れ側も出稼ぎ側もウィンウィンの関係があれば、あながち否定されるべきことでもないかもしれない。

むろん、理想は欧州のように男女とも夕食は家族で食卓を囲めるのが理想であり、将来的にはそれを目指すべきであろう。しかし、それが日本ではなかなか叶わないのは、いまの子育てママの疲弊ぶりが 50 年前と全く変わっていないことをみれば一目瞭然だ。であれば、少なくとも男女ともに理想的な働き方時代が到来するまでは、出稼ぎシッター制度を有効に活用できるような仕組みを政府が後押ししてはどうか。最近は様々な場面で個人的にそのような声を政策関係者に届けてはいるが、出てきた答えは、派遣会社が高い時給の外国籍のシッターさんを派遣できる仕組みで、がっかりだ。これでは、とても働くママが

シッターさんと二人三脚で子育てに取り組めるような代物ではない。

しかし時は刻々と過ぎていく。最後の卒業生を世に送り出すに当たって、こんなことがまず心配になっているのは、やはり定年という年のせいなのか。いつの間にか、女子学生の幸せを願う祖母のような心境になっていることに我ながら驚かされている。今年の卒業生がこの厳しい時代を勝ち抜いて、男女ともに見事なキャリアと円満な家庭生活を両立してくれることを願ってやまない。

最後になったが、幹事長の相川さん、副幹事長の谷口さん、土井下さん、そして会計の佐藤さんをはじめゼミ生諸君には2年間大変お世話になった。ゼミ生どうしの仲が良く、全員が仕事を快く引き受けてくれたお陰で、非常に良い雰囲気 of ゼミ運営ができたと思う。特に木浦さんはじめ今年のOB会係には、私の古稀記念パーティの企画実行で大変お世話になった。ここに記して、感謝の意を表する次第である。

大隈翁像が見守る早稲田の杜にて

2018年3月